

三高基督教青年会と折田彦市（2・7・21）

三谷 健次（昭10・理甲）

只今ご紹介頂きました三谷でございます。平素はご無沙汰ばかり致しておりますが、私共第三高等学校基督教青年会（以下、三高青年会と略称させて頂きます）が創立百周年の記念出版を行うに当たり自昭会から多大のご援助を頂きましたことを心から感謝申し上げます。その感謝のご報告を兼ねて、今日のお話をさせて頂くことになろうかと思っております。

只今ご紹介にございましたように、私共第三高等学校基督教青年会は一九八九年（昭和六十四年）の二月十一日に創立百周年記念を迎えまして、その行事を感銘深く行わせて頂いたわけでございます。けれども、その際に何分にも完全な名簿がございませんでしたので、案内もれの多かったことをご出席の方やそれを伝え聞かれた先輩の方々から指摘されまして私共大変申し訳なく思ひまして、それをきっかけに、一年足らずでございましたが、ここにおられます大中都四郎兄それから長尾正昭兄が主となって下さいまして百周年の記念の刊行会を実施致しましたところ、

先程申し上げましたように、自昭会からも大変思い入れを頂きまして、完成させて頂きましたことを心から感謝申し上げる次第でございます。と同時にその時にやはり同兄等が主となりまして、栗原基先生の記念集をそれ以前に出しておりましたが、これも先輩の方々が伝え聞かれまして、もう手元にはなかったんでございますが、是非復刻致したいということで、これも含めて自昭会の御世話になった次第でございます。御陰をもちまして、この度、先輩の方々の御醸金と合せて、ほぼ完成の運びにならせて頂いた事を併せて御報告申し上げ感謝申し上げますと存じます。

私は先程ご紹介ございましたように、昭和七年に三高に入ったわけでございますけれども、その時点から今日に至りますまで、両兄始めその後の寮生の方々とも深い交りを頂きまして、今でもやはり、二月十一日ということになりますと集まりまして、當時を語り、既に亡くなられた友を偲び、歓談の時を持たせて頂いております。その世話役を寮時代から今日に到るまで長尾兄が総て引き受けて下さっているのが今日まで続けられている理由かと存じます。これも併せて、本席を借りて感謝申し上げます。

私はもともとクリスチャンというのでもございませんで、実は私が三高に入ります前年の昭和六年の八月十六日、今も忘れることが出来ませんが、京都でいえば大文字の送り日の日でございますが、私の特に親しい友人が自殺をしたわけでございます。大変それがショックになっておりまして、折角三高に入れたのに余り若々しい青年の気持にもなることが出来ず、青年会に入れて

頂いたという次第でございました。私が入りました三高のクラスに森口繁一君という大変な秀才の方がおられました。この方は小学校が五修、中学校は四修でそして三高の入学試験の時にこれはご本人も言っておられることですが、とにかく満点という事でございました。三高の三年を終りまして、溝渕進馬校長を囲んで、体育館で卒業生一同記念の会を催した事がありました。校長先生から色々お話を承わったのでございますが、それに続く座談会の席上で森口とは誰かと、こういうことを溝渕先生が申されまして、「君、満点だったネ」といわれ、改めて感心したわけでございます。そういう秀才が私共のクラスにおられまして、今も尚ご活躍中でございます。それにつけても私が先程申し上げました、自殺した私の友人も又、接しました年代が違いますが、それは素晴らしい秀才の方でございました。秀才とはこういうものかと改めて思わされたことでした。その時はよく知らなかったんでございますけども、彼のお父さんは東北大学の数学の教授をしておられまして、33歳で教授になられたんですが、もうその年に亡くなられて、遺族の方々が私共の郷里に引き上げて来られたわけです。

私の郷里は三重県の上野でございます。彼のお母さんはお茶の水の女子高等師範出です。から当時ではまさに最高の教育を受けられたご両親でございますので、その子である彼の秀才振りは又素晴らしいものでございました。すべての学問について、単に数学とか国語とかそういうことばかりでなくて、作文とか或は絵を描くこと、そうしたことに於ても、素晴らしい秀才の方でござ

ございました。しかし好事魔多しとよく言いますが、お父さんが亡くなっておりますから好事とはいひ切れませんが、小学校五年になります時、私達は薬の飲み違えというふうに聞いておりますが、脳の一部が破壊され、名古屋大学の病院で何回も手術を受けたのだそうですけれども、遂に快復するに至りませんでした。その結果、容貌もすっかり変わり、心ない者達は彼を小馬鹿にしておりました。

ある日お母さんが私のところへ見えまして、私も丁度若げの至りで学校をやめ、流浪の旅をしておりまして、一年遅れたものですから、まあ友達になってやってくれということで、ずうっとつき合わせて頂いた次第でございます。しかしお母さんは余りの心労の故に視力を失っておられました。それまでは田舎の女学校の先生をしておられたわけですが、それも退かれておられました。彼のお父さんの名前は今でも岩波の数学辞典に小島の定理として二ヶ所出ております。親しく彼とつき合わせて頂いたんですけれども、いよいよ来年卒業という昭和六年の八月十六日に入水自殺をして果てました。私はすぐに伺いましたのですけれども、お母さんが見えぬ目で私を抱きかかえるようにして、その友達のところまで連れて行ってしばらくの時を過したことを思い出すわけでございます。

そういうこともございまして、非常なショックであつたわけです。なぜ死んだのだろうかというその思いが、私にはそれからずっとつきまとうわけでございます。なぜ死ぬかということは当

然の話かも知れませんが、あれ程に恵まれた才能を持ち、お母さんも非常に親切な方でした。武家の出でございまして非常につつましやかな方でございまして、決してえらそうにとかそういうことはございません。非の打ち所のない、ご家族の方でございましたのに、どうしてそういう不幸がおそうだろうかと、そういったことが私の脳裡から離れず、解け難い謎の様に私には思われたわけでございます。しかしその友が生前私に語りかけることは、数学のこと、文学のこと、その他哲学のこと、音楽のことで、数々のことを語り合ったというそのことが私の中にやはり一つの支えとして今も甦って来るわけでございます。

そしてなぜ来年卒業するという盆の送り火の日の八月の十六日という日を期したのだろうかということについて、今から思い起してみると、もう三谷が卒業すると、自分としては行く道がないという、そういう想いがあったのではなからうかという想いがされるわけでございます。やはり同じ私達友達の仲間の中に一人詩人の方がおられまして、やはり彼のことを書き留めてくれました。その詩人は彼即ち自殺した友人の書き残した一つの詩がございまして、それはお母さんへの思いを綴ったものでございましたのですけども、そのお母さんが、自分がこの世に希望を失っている時に、神様のことを語ってくれたと、そういう一語があるわけです。そしてその詩人は、私に、そう自分を責める必要はなからう。彼は病氣であり、自分が将来一人前に立って行けなくなる。そういう重荷の中に、お盆の終りの日に霊を送るその日を選んだのだからということで、慰

めの言葉を頂きましたのですけれども、やはり私には忘れ難く、三高に入ることを許されても、嬉しい筈の私も心重く、しかし他方では深く人生を考える機縁となりました。入学いたしまして後、当時イエスの僕会、というのがございまして、これは総理大臣にられました大平さんもその会に属しておられました。私は勿論直接には存じ上げませんですけども、そういう会に属しておりまして、私が三高に入りました時に、やはりイエスの僕会の会員であり、三高の先輩である三鼓慶蔵（昭八文甲）さんという方の誘いで法然院の直ぐ下の貸家を借りて、仲間と一緒に自炊生活を始めたわけですけども、さっぱり、勉強が出来ませんので、その由を当時の制度としてありました補導教官の山谷省吾先生に申し上げましたら、そりゃあ、三高青年会に入れと言われるか言われないうちに、大中都四郎君が荷車を引いて、これも先輩の黒縁の眼鏡をかけた、いかつい身体の津吉孝雄兄（昭八文乙）と二人で迎えに来てくれました、否応なしに青年会に入れられたわけでございます。

青年会と申しますと、私もそうですけども他の部活動と違いまして、極めて地味な会でございますので、ここに居られます皆さまも余りご存知ではなからうかと思うんですけども、その青年会のありました場所は荒神橋のたもとでございまして、今の京大会館がございしますが、あの斜めの道を荒神橋の方に向って行かれました所です。川端通りに出ます手前の所に、今でもその一部が自動車の駐車場として使われておりまして、そこに簡単な記念碑があり、これも大中兄と長

尾兄の肝入りで建ててくれたものでございます。そこに寮がございました。その寮は非常に大きな土地の中にございまして、私達田舎から出て来た者はびっくりさせられたのですけども、その敷地の中にテニスコートが一面ございました。門を入りますと門衛といいますか守衛といいますか、そういう建物がございまして、そこにご夫婦の方が住んでおられました。入りまして真正面に植込みがございまして、その向うには古ぼけたチャペルがあり、その奥にテニスコートがありました。テニスコートの東の方に寮が伸びているという格好の所で、大変広いのびのびとした場所でございます。又、その西の方に当時栗原基先生が住まわれている主事宅がございました。全部で七四五坪と聞いております。

今度板倉創造さんのまとめられました折田彦市校長の「一枚の肖像画」を読ませて頂きました。そこには折田校長が過ぎられましたプリンストンのことが度々出て参るわけでございますが、私もプリンストン大学にわずかの期間ですけども参りまして、折田校長が直接三高青年会の寮をそこに建てられるとか、そういうことはございませんが、折田校長がプリンストンを思い出すような空気といえますか、雰囲気というものがあつたのではないかと思われました。青年会の寮のある所はやはりああいいう加茂川通りのささやかな場所でございますけれども、何か日本ばなれのした雰囲気を感じさせられたわけでございます。寮ですから別かも知れませんが、テニスコートまで備えられチャペルまであるという所は、普通はなからうかと感じられたわけでございます。

そういう所で過させて頂いたわけでございます。

今回百周年を迎えるに当りまして、私共の先輩がこの青年会を作るにつきまして、どれ程ご奮闘されたか、若々しい希望を持ちまして始められたかということを、殊に板倉創造さんの集められました折田彦市の資料を拝見しまして深く感じさせられた次第でございます。それと共にやはりその頃相前後いたしました田村初太郎という方がおられ、三高Yを創めるのに尽されました。これは会報の48号、一九七七年でございますけれども、加納重朗氏が「田村初太郎について」というのを出版されておられます。この報告書をまとめられました加納先生は、三高を昭和24年に卒業されまして、現在、平安女学院でチャプレンをしておられる方でございます、その方が田村初太郎の略歴といいますが、追悼というのを一九七七年に会報に出されております。

また、青年会には創立三十周年（大正七年）に発刊された「鴨畔の一群より」と題する一冊子がございます。それ等を参考に致しまして、三高基督教青年会が如何に成り立っていったかを学ばせて頂いたわけでございます。

それから推察されますことは、三高基督教青年会の芽生えは、明治十三年大阪天満基督教会での、大阪専門学校学生による浪速基督教青年会創立にあるような印象を受けます。又、京都に参りましてこの青年会の組織や土地建物の形をなすのに田村初太郎の力が大きかったのを改めて思われる。勿論それを担う中核は当時の若き先輩でございます。更にその背後には直接手を下さ

第三高等学校基督教青年会設立史

西 歴	日 本 歴	事 項
[1847]		森有礼薩摩藩に誕生]
(1849	嘉永 2	折田彦市、父寧剛、母志計、家格高き薩摩藩士の四男として生まれる)
{1852	嘉永 5	田村初太郎、父弘藏、母光、浜松添奉行の次男として江戸に生まれる}
1853.07.07	嘉永 6	アメリカ海軍提督ペリー「黒船」浦賀沖。
1854.03.03	安政 1	日本和親条約締結。(外圧による開国)
1858	安政 5	ハリス、日米修好条約締結。(踏絵禁止、米人の信仰保証、礼拝堂建設許可)
[1858	安政 5	森有礼藩校造士館に入学、後折田も机を並べる]
[1865	慶応 1	森有礼19才、英国留学「海軍運用測量及び機関術」。ロシヤ、パリ、後米国へ。
[1868	明治 1	森帰国、岩倉具視を訪ねる。議事体裁取調御用]
(1868	明治 1	明治維新。折田、島津茂久公に随行し上洛、岩倉具視の御附役)
1869	明治 2	舍密局開講。以後 洋学校、理学所、開成所、第一番中学校、開明学校、大阪外国語学校、大阪英語学校、大阪専門学校、大阪中学校、大学分校、第三高等中学校、専門部学校、第三高等学校等と改名。
[1870~1873	明治 3~6	森、駐米代理公使、日本近代化特に教育制度研究、留学生監督。その間、

論文「日本に於る宗教の自由」「日本に於る教育」「日本語廃止論」]

(1870～1876	明治 3～9	折田、岩倉二公子を奉じて北米留学、プリンスン大学、 <u>1876.5.28.受洗</u>)
{1870～1878	明治 3～11	田村、渡米、1871年岩倉特命全權大使に随行し欧米視察、 <u>1877.5.8.受洗</u>)
1873	明治 6	キリスト教禁制政策撤廃。
(1876	明治 9	折田、大久保利通推薦で文郎省入)
[1878.6	明治11.6	森、外務大輔]
{1878～1889	明治11～22	田村、大阪英語学校(高良二校長)。以後明治27年第三高等中学校解散まで在職。 その間大阪浪速教会、大阪専門学校生徒により浪速基督教会に <u>浪速基督教青年 会設立</u> (明治12年)、大阪梅花女学校校長兼務、天満教会転籍}
[1879.11	明治12	森 英国公使、伊藤博文憲法調査の為渡欧]
(1879.10	明治12	折田 明治12年外務省に入るも病と称して辞職、「体操伝修所」主幹。)
(1880.5	明治13	折田 大阪専門学校校長、同年12月大阪中学校と改称同校長、明治18年7月大 学分校と改称)
[1885.12	明治18	森 初代文部大臣]
(1885.12	同上	折田 大学分校辞任、文部省参事官、翌19年3月文部省学務局長、「学校令」公 布準備の任に当る)

1886.4.29	明治19	大学分校、第三高等中学校と改称。同年11.30.京都設置に内定、移転準備。
(1887.2	明治20	折田 第三高等中学校長に復帰)
[1889.2.11	明治22	森 憲法発布の朝 官邸玄関にて刺客に襲われ、翌日死去]
1889.8	同年8月	第三高等中学校 京都吉田本町 (現京大本部構内) に移転。
{1889.7	同年7月	京都移転、上洛早々基督教青年会(YMCA)の形成開始。同年10月第三高等中学校 雇波多野安静, T.W.Gulick, 生徒等により第三高等中学校基督教同盟会組織)。
1892.9.?	明治25	Gulick 氏の一年後の任期を前に会館建設を計画し募金開始。
1893.3.2	明治26	Gulick 夫妻の尽力により米国篤志家 Holland 氏より三千円の寄付を得、田村 初太郎氏等の熱心な斡旋により 吉田河原町十八番地に七百円にて七四五坪を 田村初太郎名義にて購入、千五百円にて会館建設。
1894	明治27	○同年十二月九日 折田校長を始め数名の教授生徒、来賓等出席開館式。 ○九月十一日 新学制第三高等学校並びに青年会誕生。○十月二十二日 田村 初太郎静岡県尋常中学校浜松分校校長兼任赴任送別会。
1908.7	明治41	田村初太郎寄宿舎建設委員長の下 YMCA総幹事より五千円の寄付にて寮完成
1910.11.26	明治43	折田校長勇退。
1915&1920	大正4, 9	○田村初太郎 大正4年5月21日逝去63才○折田彦市 大正9年1月26日逝去72才

れませんでした。折田校長の熱き眼指しを感じずには居られません。明治廿六年のチャペル献堂式には折田校長も出席されて喜びを共にして下さっております。そういう先輩のなされた歩みのことにつきまして、自分のメモにもと、まとめさせて頂いたのが、お手元にございます三高基督教青年会設立史というものです。ございます。

その中で、よく森有礼が出て参ります。これは、板倉さんの編まりました折田校長に関する記事の中で、度々出て来られる方で、勿論皆様ご存知の初代の文部大臣の森有礼という方でございます。私も、この板倉さんのものを読まして頂きまして、これが折田彦市と同郷であること、一年違いでございますけれども、同郷で、常にお二人は行動を共にしておられたということでございます。それで、それをまとめるにつきまして、私は、自分勝手に森有礼につきましては、四角いカッコでくくられて頂きまして、折田校長につきましては、丸いカッコでくくられて頂いたわけでございます。細いことは省略させて頂きますが、それをご覧頂きますと、いつも森有礼と折田彦市が、ペアーの様になって相前後して並んでいるということでございます。藩校の造士館に入るのも、そうでございますし、アメリカに参ります時もそういうことでございますし、それから、折田校長が関西に来る、そう言った時も、何時も背後にありまして、森有礼があるという、これを板倉さんの文から深く教えられた次第でした。

私が、森有礼につきまして関心を持ちますのは、ちょっと後で、又申し上げたいと思うんでご

ございますけれども、偶然の事で、私自身、森有礼ご自身では勿論ございませんが、ご子息の森明の事を学び、そのご遺族の方々とお交りを願ったことから、余計に森有礼と折田彦市の関係というものが私に深く心に焼きつけられたということでございます。そうしまして、三高青年会の実際の活動というになりますと、やはり田村初太郎ではないかという感じを持ったわけでございます。折田校長、森有礼のことにつきまして、板倉さんの所に記されておりますので、ここでは田村初太郎さんのことにつきまして簡単にご紹介をさして頂きたいと思えます。

明治の初期というのは、大変私達の歴史で学んでいる以上に複雑な世相であったという事を学ばれます。実感として思い起す為には、先般NHKで放映されました「翔ぶが如く」にも示されましたが、更に私は海音寺潮五郎の「明治大平記」という小説を読んでおりました。この小説は、明治開花期、旧南部藩内の尾去沢銅山の採掘権を、大蔵省の首脳者たちが御用商人と結託して横領しようとして企てる疑獄事件を通じて薩長の藩閥の専制体制があばかれ、西郷の改革論、板垣の民選議院論、大久保の独裁政治論が現われる。そして西郷をして、旧幕を倒して新政府をこしらえたが、起って来る結果は間違いだらけだと慨かせる。利害だけが先に立ち、人間のすることには期待が持てない。という様な小説でございます。大変面白い小説でございました。その疑獄事件を発していくのが、佐幕藩の面々でございます。明治開花期の基督者も、一方では薩長の救国の志士があるかと思えば、他方では維新で破れ、家禄まで失って、官界にも出られない佐

幕藩系の者であつたかと思われまゝ。田村初太郎も内村鑑三とか、そう言つた方と同じ様に、佐幕派じゃなかつたかと思ふんであります。田村初太郎というのは、静岡・浜松の方でございまして、記録によりますと、当時、アメリカに渡りましたのは、ほとんど皆、脱藩をしたわけですけども、この田村初太郎という方も、初め江戸で勉強しておつたわけですけども、初太郎の父が明治元年十一月浜松添奉行となつて、一家は浜松に歸っているわけです。初太郎は改めて東京に出て勉強し直すことになつたのですが、その時に志を立てまして自分の持物を賣つて百兩を作り、メキシコドル九十三ドルに換え、アメリカに渡るわけです。初太郎は時に十七歳と九ヶ月、明治三年でございました。それから明治十一年に帰国するわけでございます。折田校長は明治三年から九年にかけて田村初太郎とは独立にアメリカに渡ります。折田の場合は岩倉公の二公子（具定、具経）を奉じて謂わば公務を帯びて北米に留学をされたわけですから、折田校長はプリンス・トン大学で受洗をされております。他方、田村初太郎も、やはり受洗をされておりますけれども、彼はオハイオ州のオバリン神学校に留学して、組合教会の方で受洗をされております。他方では折田校長はプリンス・トン大学で長老派教会の方で洗礼を受けておられます。

長老派とか組合派というのは私達もよく知りません。知りませんといひますのは、日本で、やはりそういう長老派系、組合派系等がありますけれども、向うの歴史と私達の歴史と違いますから、なぜ、私共が、やれ長老派とか組合派と言わなければいけないのか、わからない所です。そ

れでも、やはり日本の場合でも、現在、同じキリスト教会でも様々な教派に分れたものがございます。私共は戸惑います。例えば神学部に致しましたが、同志社は組合系統であるとか、東京神学大学は、長老派系統であるとか、対立というのか、何か知りませんが、何か、そういう伝統が残されておりまして、私達伝統のない日本では納得がいきかねる所がございます。けれども、とにかく、お二人とも別の教派ではございますが洗礼を受けておられます。その洗礼は、いずれも、愈々日本に引き上げるといふ、その年に洗礼を受けておられるわけです。

お二人とも、キリスト教を勉強する為に、向うに行つたのではないと言つておられますし、そういうことが板倉さんの本にも書かれておるわけです。ただ、愈々引き上げるといふことになりまして、やはりそこに将来、自分を打ち立ててゆく基本として、何を基にしようかといふことを、深刻に考えられたんだと思います。それで、折田校長は洗礼を受けられまして、これでもって、自分の中心問題とすると決心されたでしょうし、田村先生も、そういう心情の様であつたのですけれども、そういう風な気持ちにされたといふことの中に、アメリカ人が如何に親切に、しかも清らかに二人の方に接しられたかといふことが、その奥にあるのではなからうか。殊に、アメリカでは、当時、南北戦争が起こりまして、それも漸くにけりがつく。そして、新しい希望の中にあつて清らかな生活が、そこで営まれている。そこへもって来て田村先生の方は、同じく日本から行つております人々の精神的に荒れた姿を見ておりまして、自分の身の置く所をキリストに托さ

れたということが記されております。

私共の中に、やはり自分の支えを何処にもってゆくのか、ということが、ギリギリの所で問われます時に、そうした一つの決心をされたのではなからうかという感じが致します。そういう目でもちまして、板倉さんの編まりました折田校長の歩みを見ておりますと、日本の興るか亡びるかの瀬戸際に自分を置いて非常な決心をされたのではないかと存じます。

当時の日本の姿を憂うる方々が、価値感のすっかり変った日本の夜明けの中で、日本の又自分の生きる道を必死に探し求めていたのではないかと思われまふ。内村鑑三といった様な人、或は、その他のキリスト教の指導者の方々でも様々な迷いを持っているということを見るわけでございます。それは、正に日本の初期の明治維新に於る精神構造というものに由来しているということを、私共は知るわけでございます。そういう中にありまして、折田校長は西郷隆盛や森有礼といった当時の日本の指導層の中心の中におりました者として、表面の花々しさとは裏腹に西郷隆盛をして尾去沢鉦山の疑獄事件等を通して見られる暗い裏面を深く見抜いておられたのではないだろうかという感がするわけでございます。そうした眼で、板倉さんの文章の中に記されております折田校長の三高を辞められます時の「回顧三十年の観」というのを讀ませて頂きますと三高が三高として落着くまでには度々学制改革が行われます（会報六十号参照）。その一つ、それは折田校長が明治十三年大阪専門学校の校長として赴任した時の事でしうか。文部省では経費節減

と称して突然専門学校を廃止し模範中学を作るつもりで中学校とした。折田校長は「乱暴な話です。生徒は行き処なく、当然目的を変更しなければならぬ」と憤懣やる方なく語っておられます。

その後明治十八年、我が大阪中学校が又々学制改革で大学分校となります。十八年から廿年まで折田校長は文部権大書記官として文部省にありますが、廿年に大学分校に戻ります。森有礼文部大臣の意向で何れ大学にするつもりで、廿二年、今の京都大学の所に大学分校が高等中学の名前で大阪から移転します。所が生徒は少ないし、既に森文部大臣は凶刃に仆れて亡く、廿五、六年頃になって井上毅文部大臣は当初の方針を変えて最高学府は東京に一つで足りるとし、東京より少し程度の低い大学として京都には試みの第一歩として法学部、工学部が置かれます。従って今迄の高等中学校は解散しなければならなくなります。折田校長は「これが私にとつて終生忘る可からざる痛心事」として心境を語っておられます。更に続けてこう語られます。「人の子供を預かつて、こんな残酷なことは出来ない。二度と解散などという様なことをやられるなら、きっぱりお暇を貰う」という、こういう言葉を残しておられるわけでございます。実は、私共も今度久米直之先生が、お話下さるそうでございますが、三高最後の年に出合ったものでございます。あの時、島田退蔵校長が、三高看板を降ろされた時に立ち合った者でございますけども、今から思いますのに、その当時、若し中枢部に折田校長のことを知っておられ、我が高等学校があな

たの国アメリカの精神を模範とし、キリストの精神に従って出来たものですよと強く主張する方が居られたとするならば、もっと違ったやり方があったのではなからうかと愚痴めいたことを思われます。それは私共も、今になって初めて知るわけでございますけれども、折田校長の歩まれた道を見ますと、全くアメリカに於て培われた自由精神を中心に致しまして、三高があったわけでございます。それを、あたかも、何かヨーロッパ系、殊に多分、私、思いますのに大学の学部と言いますのは、フィヒテの本から推察致しましても、ドイツ系統の精神が多分に入っておりますのではなからうかと思うわけです。ドイツの学風と言いますか、あるいは講座制と言った様なものも、やはりドイツの系統の感を深くしたわけでございます。何れに致しましても、当時におきまして、もし旧制の高等学校特にも私共の三高で考えますならば、折田校長がおられて、そして、アメリカで学んだそのことを自分達の高等学校の校風としているんだということを申し上げてくれる様な方がおられたらとそういう感じを持つわけでございます。

最後の時、三高の看板を降ろされる時に、それに引き続きまして、大学の制度が変わってゆきまして、三高は教養部ということになったわけでございます。それで、私も当時、教養部学生の面倒をみることに関係しておりまして、その頃一人の学生に自殺者が出ました。それで、その学生のお宅に上ったことがあります。そうすると、そのお宅の方が、私に対しまして、教養部とは何ですかと、こういうわけです。で私も教養部とは何ですかということ考えてもおらなかったん

ですけれども、外から見れば、確かに教養部というものは、無きに等しいものであったわけです。と言いますのは、京都大学に入った学生は全部、一応、教養部に参ります。だけど学生諸君や或いは御両親から見ますならば、学生証には教養部がなくて、全部、学部の部長の身分証明書になっておるわけでした。教養部と言うものは、何にも姿を表わさない。主観的には私達も教育の責任は持つ訳ではございますが、そういう主観的とは別に客観的には決してそういう姿ではないと言うことです。私も、当時職員組合の支部長を致しまして、そういう抗議をしたことがあるのですが、すけれども、それは、とにかくその当時、既に新制高等学校までは形を成しておったわけですが、学部は何かと言うと、旧制のままの頭をもっているわけです。教養部は新制高等学校と旧制大学との間にはさまれて、命の通いようなない姿でございました。新制大学になりましたとにかく、専門的な知識を学生に与えて世に出すこと。これは多分至上命令だと思っんですけども、新しい大学の根本理念が問われないままで、とにかく機能面だけが先に立って行ったという感じです。四年間の中で、どういう風な理念で教育するのか、新制大学とは何かということが充分問われておらなかったのではないだろうかと思えます。私もアメリカの制度を見に行ったのでございますけれども、そういう教養とか専門とか、そういう分け方、それは各州で違うのかも知れませんが、すけれども、そういう姿のものは見かけなかったのです。何か、もっと全体的な流れの中で考えて欲しかったなと、そういう感を深くするわけでございます。

折田校長の色々なことを板倉さんのもので学ばされたわけでございますけども、森有礼との関係について、ふれさせて頂きたいと思います。これは、私的な事で申し訳ないのでございますけども、私、大学を卒業致したのは、昭和十三年で一年間、会社の研究室におりまして、十四年から星一つで兵隊にとられ、昭和二十年まで兵隊でございました。途中短期技術将校というのが出来まして、少佐になったわけですけども、その時に、私、始めは航空発動機の研究を命ぜられましたのですけども、余り直接、兵器に関係する様なものは、かなわんと思ひましてロケットとかジェット機なんかだったら、すぐには役に立たないだろうからという下心がありまして、それは表面に出さないで、新型兵器としてのロケットの有用性を所長の前で説いたわけです。「お前、それ本気か」と言われますから、言ってしまった以上、そうでないとも言えませんし、所長も、まあよからうということ、勉強させて頂いたわけです。その為に東大の航空研究所、今の多分宇宙研究所に相当するかと思うんですけども、そこで二年間勉強させて頂いて、非常に良かったと思つてゐるわけです。国費でそんなことさせて頂いて、申し訳ないのですけれども、私が研究を始めました昭和十六年頃には、まだそんなものを航空に使うという様なことは、少なくとも私の周囲では、まだ誰も考えておらなかったのですが、途中からドイツの情報が入りまして、日本の国内でも、三菱・川崎というのがやる様になったわけです。

私共の研究所が立川にありましたが、段々終戦近くなりますと爆撃の為に、研究が出来ません

ので、松本に疎開をしまして、松本の今の松商学園に疎開をしたわけです。その近くに一軒の家がありまして、二階建てだったんですけども、軍の上層部ではロケット研究は秘密兵器であるということ、あの家は目障りだと言うことで、警戒しておった様ですけども「それでは、私が参りますから」と言つて、その家へ見張り役という恰好で私は下宿をさせて頂きました。後で、その方に聞いてみますと、やはり軍と、そこのお宅とでいろいろ交渉があつた様です。そのことは『風の翼』という本で、関屋綾子という方が本を出しておられますので、その記述の方が確かだろうと思うわけですけども、その主人は関屋義彦と申されました。

ある日、書斎へ入れて頂きました、主人と話をしますと、主人は当時の松本高等学校の倫理の教授です。その書斎の本の中に、森明という本が並んでる。並んでるというのは、森明選集、全部で一冊なんです、それが何冊か並んでるわけです。私は「あれ」と思いました。森明というのは、私、三高青年会におりました時に私共の同じ年度の者に、岡本敏雄（昭一〇文乙）というのがおりまして、その方が共助会と言うのに入っておりまして、それでその共助会の創立者である森明のことを聞いておったので、そのことを申し上げましたら、その奥さんが、あれは私の父だと、こういうわけです。だから関屋綾子さんのお父さんといえますのは、森明です。森明の父が森有礼なのです。森有正という方がおりますけども、この方は東大の助教授をしておられまして、助教授の時にフランスに行き、ずっとフランスで過して、今、森有正全集というのが十何巻

か出ているわけですけども、その方は、関屋綾子さんの兄に当られます。私はそういう方々に出会いまして、京都の三高青年会で岡本君から、よく聞かされておりました、ということを書き述べて、いろいろ話をしておりますうち、その岡本君が行っております共助会の指導者が奥田成孝と言いまして、これは大正時代の文部大臣の奥田義人のお子さんでございます。その方が森明のお弟子さんです。その方は、北白川教会というのを作りまして、そこにいろんな方がおられます。

例えば、岩倉具視のお子孫の方が具実と言いましたけども、その方がおられたわけですから、色々話を伺ってうちに、森明のお母さん、言い換えますと、森有礼の奥方が寛子と申されまして、その方が岩倉具視の息女に当られます。森寛子という方は二度結婚されておりました、前の御主人と言いますが、久留米藩主の有馬頼満で、その御子様達に頼寧、頼義の方々がおられます、文筆家であったり、革新的であったりされます。その辺のことは、ガチャガチャ致しますので省略させて頂きますけども、不思議な事で私は森有礼一家の方と親しくさせて頂いたことになります。そういう関係が鹿児島藩と結びつき、折田校長を中心にした様々な人脈が私共の頭の中に出来て参りますし、殊に、NHKのテレビで「翔ぶが如くに」というのがありました、段々とイメージが出来てくるわけでございます。その様な拘わりの続きとして、殊に折田校長が尊敬し、行動を共にした先輩の森有礼が凶刃に倒れた思想的背景、又その思想的背景が折田校長の教育の理念とどの様に関わってきたかが、些かでも想像される気がするのであります。即ちそ

ここにその当時作られました日本神道というものと、新日本建設の過程で、当時の日本には欧米のキリスト教のような精神的支柱がないということが当時の指導者に段々自覚される様になって参ります。その辺に就きましては、岩波から「国家神道」という新書本が出ております。それは、明治初期に於る国家神道の成り立ち、というものが書かれておるわけでございます。それによれば、キリストの神に代るに天皇を、聖書に代るに教育勅語を、教会に代るに神社をとという事で、国家神道が出て参りますし、天皇制が出てくる訳でございます。その天皇制のことが、私共の胸の中に深く入っており、又、信仰の自由を憲法で認めながら、他方では天皇絶対の憲法であった訳です。それはキリスト教を排除する為に作られたとも受け取られる形になっておまして、いわば一種の国教であり、国の宗教であった訳でございます。森有礼の暗殺も、その一環とも受け取れますし、折田校長の御苦心のあったことと私には思われて参るのでございます。即ち折田校長は御自分をキリスト者として言葉で言い表わすのではなく、その人格を通して表わす。それが「自由の精神」であつたかと思われまゝ。然し他方でキリスト教が当時排除される方向を取ろうとしたのには、当時の意識として無理からぬ所もあつたと思われまゝ。それは徳川幕府から引き続きまして、ヨーロッパの植民地政策というものがキリスト教というものとは、ぬけ難いものであるとして私達国民に印象づけられていたかと思ふのです。

明治の維新になりましたも、その空気というものが深く残っております、それが、又、何か

と宣伝にも使われますし、実際に、そういう所もあったのかと思うわけですけども、様々の歪みを我々に与えておりまして、今でも我々の年代からしますと、キリスト教というのは、そうしたいわば敵国のと言いますか、そういう意識が深かったのではなからうかと思うわけでございます。岩波の「国家神道」を見ましても、いろんな説明の仕方がありましようし、左翼的なものもあるでしょうし、いろんな見方がある様でして、私は、別にどうという風な判断もしかねるわけですけども、一つの見方として我々が若い時に学んできました修身とか倫理といったもの、あるいは教育勅語といった様なもの、そういうものが、今から見ますと、一つの姿をもって、今の私共にイメージされて来るわけです。それは、どういうことかと申し上げますと、明治の初期に於きまして、いわゆる富国強兵ということは、誰にも受け入れやすいことですけども、思想の中心というものを何にするかということにつきまして、神道系統でも、あるいは仏教と神社関係でもあるいは同じ神道関係でも、それぞれ勢力争いと言いますか、自己主張があるわけです。例えば、同じ神道の中でも、伊勢神宮系と出雲系は違つてるとか、伊勢神宮は顕界といいますか、表れた世界、つまり、この世の世界をイメージする。出雲系は、そうではなくて、やはり、我々の安心立命といった様なものをイメージするわけです。両派は、やはり合わなくて、これは、明治天皇御自身の裁断によりまして、出雲系は排除されるということが起つております。

それから、神社と仏教系統も徳川時代には、集合神道としてあつたわけですけども、明治の初

期におきまして分離をしていきますが、その時に極端なことになりまして、仏教系が排除されてしまうという風なことが起つて参ります。他方に於て外国からの圧迫がございます。そういう点で如何にして我々の精神的な中心を作るかということになって参ります。そういう事で結局、先程申し上げましたように天皇に対してキリスト教に於る神。それから、教育勅語と聖書とを対応させるといった様な図式を取るに到ります。その上で神道が形式の上では宗教ではないという形に致します。つまり国家神道に於きましては国家神道、天皇、教育勅語と、分離されております。神道と云いますのは、これは表向き宗教でないという、そういうとらえ方をするわけです。だけど、そこに於ける祭と云いますのは、つまり、そこで皆が一緒になつてする共同体の作業です。ので共同体を確かめ合う為の祭が主要な意味を持つて参ります。それを総合しますと全体が一つの擬似宗教という形のものとして作用するわけです。そこで明治時代のキリスト教の指導者は様々な対応をする訳で、例えば内村鑑三といった様な人は始めキリスト者としての自分の証しを立ててくはないけないとして、教育勅語に対して拝まなくて、それで一高のあの不敬事件が起るわけです。後になりまして、その誤解を解くということで、今度は逆に、あたかも一方に於ては国粹主義者ではないんですけれども、それに近い様な言動が出て来る。決して日本にたてつくわけではないといった様な、そういう証しが出て来るわけです。そういう所で様々な、また解き難い問題が渦を巻くわけです。

私、その点に於きまして、折田校長は様々な事情をお汲みの上で学生に接しられたのではなからうかと思ひます。板倉さんの記事を見ましても、三高に於きましては、日清・日露に於きましても平靜に過して来たということが書かれておりますし、会報の七一号の大城富士男先生を偲ぶという北村氏の記事を読みましても、今回の太平洋戦争の最中ではございますけれども、三高の学生諸君が戦争中に於て、取った態度といい、精神状況というものが如何にも純粹であると同時に戦争というものに対して極めて冷めた目で見ておったかということを知らされるわけでございます。この様な三高生の態度からも折田校長という方は、如何に明治のそういう中枢にありました故に、その中枢で起りかねない権力闘争といひますか、そういうものの姿というものを見ておられたのではないのだらうかということを深く思はされた次第でございました。それに対しまして、折田先生は、物の本質というものを、それは多分アメリカに於きまして、聖書に於ける神というものを学んだが故に、と私は思うんですが、人問のあるべき姿というものを深く考へておられたのではないのだらうかという感を深くするわけでございます。折田校長はその精神を自由という事に集約し、それを人格で示されたと思われまふ。

折田校長は、アメリカで学び、日本の将来のあるべき姿を「自由」の中に集約し、それが折田校長の人格から滲み出ておのずから三高の校風になったと存じます。おのずからと申しまふのは、折田校長は、その「回顧三十年の観」の中で、自分は校風というものを敢て作らないと

申して居られるからであります。その三高の自由の精神が随所に旺溢している訳でございますが、その証の実例を科学の方では、湯川先生や朝永先生、江崎氏等のノーベル賞受賞に、又宇宙発展史の中の林忠四郎先生の業績等に見出す訳でございます。科学の方面の事は詳しく御説明申し上げても判りにくいと思いますので省略させて頂きますが、政治の面では会報の四十号に紹介されております島田叡を思うものでございます。この方は皆様御存じのように沖繩の知事と致しまして、あの終戦の時に亡くなられた方でございます。私、この記事を読ませて頂きまして、本当に、三高の精神というのが、ここに凝縮している様な感じがしたわけでございます。

島田先輩は、終戦の年の記事によりますと、一月の十二日に沖繩県知事の辞令を受けておられるわけです。その前に、泉知事という人が敗戦の色濃い時に、アタフタと本土へ帰ってしまつて、それで島田叡先輩に、知事の辞令が下つたわけです。島田先輩は、こう語られております。「僕が断れば、だれかが行かなければならない。他の県なら、それでもいいだろうが」と夫人に言い残して沖繩に着任されたということでございます。着任致しまして、いよいよ日本の軍も敗れ、退く時、部下が知事の身の廻りを心配し、健康を心配しまして栄養料理を差し出すと、片隅でうなづいている負傷者や病人に与えたということが書かれておりますし、日本の軍が敗れまして退却をする時に、部下の者に「使えるかどうかかわからないが、これを上げる。生命を大切に。」と言つて所持金をすべて渡し、部下を避難させ、自分は死地に向われたと書いております。この記事

を読みました、折田校長が心に描いておられた姿が伺われ、自分は洗礼を受けて、しかし内村鑑三とか、そういう人達の様には、表にキリスト教を云々することは、一言も言われなかったのですけれども、若い教え子への期待というものは、もっと自由な大きな形でもって描いておられたのではなからうかと、そういう感じがするわけでございます。もっと空想を逞しくすれば、西郷隆盛をして「旧幕を倒し新政府を造ったが、それは間違いであつた」と慨かせた、その西郷の慨きを森有礼と二人して、鎮めるかのように生涯を用いたとも受け取られます。しかし、三高も解散になっておりまして、それ故に向後は折田校長が描かれた自由の姿を、三高の中に止めておくのでなくて、その精神をもっと現在の日本の中に広く豊かに、自由に、植えつけてゆく、そういう作業を私共にも望まれているのではないかと思わされて、今日のお話を結ばせて頂きたいと思ひます。三高青年会そのものに就ては端折らせて頂きましたが御許し願いたいと存じます。どうも長時間、有難うございました。

(京都大学名誉教授・元島根大学学長)